生体システム実践研究会

10月号 2022 令和四年

真和

命慧 39 連結で炊いた
お米一升のおむすび
台座はかんらん岩です

年間テーマ

纘精髄想全

感性能力を磨き鏓の探究が
単位存在の本質を求めることにつながる

- 首都圏支部特集
  「失敗は成功の種」身近な実践1～7
- はじめの一歩
- お知らせ・勉強会案内・編集後記

2022 失敗は成功の種

首都圏支部の活動報告

支部メンバーのオススメにより、全国で栽培・生産されている生体エネルギー活用食品の中から、ネットで取り寄せのできるお店をセレクトしました。

東京湾大感謝祭のWEBサイト

身近な実践 Part 1

首都圏支部役員 × 真和編集部

全国の仲間を紹介する

2年前の首都圏支部特集では、「生体エネルギーガイドマップ」として、首都圏で活動している会員の紹介をしました。

首都圏、特に東京は生産より消費活動のほうが活発です。その特性を考慮して、日々の生活の中で生体エネルギー技術を活用した食料品・商品を消費することが「自分のため×生産者のため×環境のため」になる視点を共有しました。

2年経った今回の支部特集では、「じうしみの消費活動」とも言える、消費のあり方を外部に向けて発信すべく、2年前のマップを外部向けにアレンジ。さらにネットで購入できる生体エネルギー活用食品を支部役員のオススメからセレクトして、まずは興味を持って見て知って購入してもらいやすい体裁を目指しました。

今回制作した「自然から求められる　生体エネルギー産業ガイドマップ《首都圏版》」全16Pの印刷はジャパン・スリープさんに依頼。目に止まって購入したくなる物語を設定しています。

この冊子は、当会で出展する「東京湾大感謝祭（10月15～16日横浜大桟橋）」のブースで来場者にお渡しすることからはじめ、会の活動を知ってもらうツールとして活用していく予定です。

どんな冊子になっているか知りたい方は、首都圏支部、もしくは支部事務局・本部事務局までお問い合わせ下さい。

真和10月号が発送される頃には、東京湾大感謝祭も終わっていますが、WEB展示会の記事は1年間公開されるそうなので、よかったらご覧ください。

東京湾大感謝祭にあわせて、水をテーマに構成した記事になっています。■

https://tokyobayfes.jp/

同じ釜の飯を食う

身近な実践 Part 2

じうしみのサロン

昔懐かし「ごんごう（五合）おにぎり」を思い出し「一升おむすび」を作ってみました。単位個が大きくなると、それを維持する生体エネルギーも多く必要となる。その結果、小さなおむすびよりも、大きなおむすびは能力が高いご飯に＝美味しくなるんです!! びっくりですよね?

同じ釜の飯を食う

故事成句は先人たちが一つの現象からそこにある「法則」を見出してくれた物語です。

「同じ釜の飯を食う」も、食事を共にすることの意味をこの一言で感じることができる物語です。

どんな関係性の人でも一度食事をともにすると距離感が変わるのは不思議ですよね。ではどうしてこうした現象が起こるのでしょうか? 解析してみましょう。

「同じ釜の飯を食う」は辞書にこうあります。「同じ共同体が同じものを食べることによって、同体としての帰属意識を持つこと。あるいはそれを強化すること」（wiktionnary より）

食事は、どんなものを、誰がどう調理して、どこで誰と、どんな心持ちで食べるかの情報（物語）がすべて一つになり、食べた人の体に摂り入れられます。肉体はこの食の情報の集積であり、この物語が相似形で力量位があればあるほど体内に共鳴因子が蓄積されて「共振・共鳴」しやすくなります。

食事の情報が体内に摂り入れられ、消化器官の環境を通して肉体の情報を変えることで、同じ釜の飯を食う人たちに共通の環境ができるということです。これは同じ食事を共にする回数が増えれば増えるほど、生体エネルギー準拠位置が高ければ高いほど、その影響力は増大していくと考えられます。

例えば、ある人との距離を食事で縮めたいときには、能力を高めた環境と食材で手料理を一緒に食べるのが一番でしょう。つくり手の想造が食事に加わることで情報量は増大します。畑で自分が育てた能力の高い野菜を一緒に丸かじりできたら最高ですね！

外食であれば同じ料理を頼むか、大皿で取り分ける形式が情報の共有からすると有効と考えられます。この際も、食べる環境によって共鳴因子の情報量が変わるので、環境をどうするか? はとても重要です。

ことのはじまり・・・

「同じ釜の飯を食う」に生体エネルギー理論と技術を活用した試みが東京で行われています。その名も「じうしみのサロン」。昨年の真和でも少しだけご紹介しましたが、どのような経緯ではじまったのか? そして、どう変化していったのかもあわせてご紹介していきます。

じうしみのへの道

じんるい が
うちゅう
しぜん の一員として生かされ
宇宙自然の中の万物（みんな）と共に
これからも豊かに生きていくために
みらい からも求められる
のうりょく を探究していきたい

千人千様のじうしみのへの道のり。

私たちひとりひとりにできることは必ずあります。

それは何でしょうか?

塚越美知子さんは「じうしみのサロン」を始めようとしたきっかけを次のように話してくれました。

「私たち会員が目指す「じうしみの社会」に向けて、仲間と視点合わせをしながら共に気づき成長していくための場が欲しかったんです。場がないとものごとは起こりません。場があると想造が生まれるので、その

場をどう設定したらいいか考えました。

最初は「じうしみの」について学び、動き出す道場的な場がイメージとしてありました。

この「じうしみの」を体現して私たちの能力を高めていくためには、その情報を体にインプットする必要があります。そこで「じうしみの」の物語が入っている命慧を使うことを思いつきます。（P5：命慧の物語参照）

私たち日本人の主食であるお米を、命慧を使って炊いて、みんなで食べることで、「じうしみの」の物語を食から取り入れるアイディアが出てきました。お米はもちろん、生態系生体システムプログラム農法の最高のお米。単に命慧を使うだけなら自宅でもできるので、みんなで自分の命慧を持ち寄って連結し、可能な限り力量位を高めた環境で実践することにしました」

命慧を使うだけでなく、その前提となる電気と空間の能力も重要になってくるので、さとり（L-W6、いるなけみ電気、新次元）、しらべちぢち（動物用、植物用、元素用）の3点セットが入ってるグレイシーの場をお借りして開催することになりました。

じうしみのを食べる！

学問的に「じうしみの」を学ぶことも必要ですが、食と環境を通して学問を身につけるというのは、生体エネルギー哲学的加学ならでは、ではないでしょうか。実際にこの実践の話を他の支部の方にすると「是非自分たちもやってみたい！」という声がいくつも上がってきました。今回の記事もそうした方々へのきっかけになればと思います。

「じうしみのサロン」では、打ち合わせ的になにかを決める場というよりも、食と空間を通して場を共有し、そこから自然と想造されるものを大切にしています。まさに「同じ釜の飯を食う」ことによる、意識の共有と、感性の向上、いわば動き出す前の土壌づくりを行っています。

じうしみの行のために必要なこと

自分の心身を維持するだけで精一杯な人は、新たになにかを想造したり、人を豊かにしたり、外に向けて発信する余裕がないことが多いのではないでしょうか。じうしみの行をしていくためにも、心身想造の健康・健全は必須です。

最初は参加しているだけでも、段々と能力が高まってくれば自然と動きにつながっていきます。

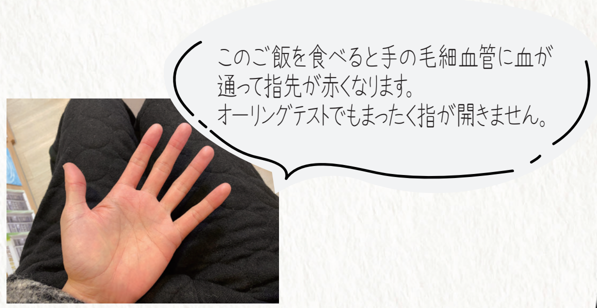
しかし、いつまで経っても自我が満たされることを知らない餓鬼界に陥ってしまえば、菩薩行など夢のまた夢。「じうしみの」すら食べられてなきものとされてしまうでしょう。

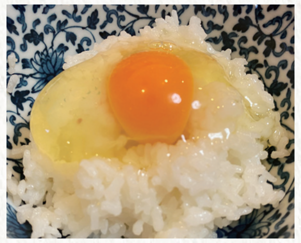
必要が生む場

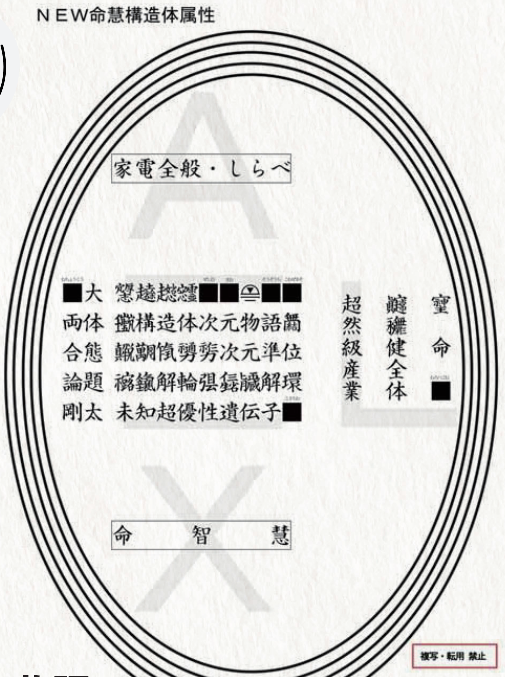
昨年12月から3週間に一度を目指して開催されている「じうしみのサロン」も9月7日で13回目になり、参加者みんなが継続することの意味を感じています。

今までもマルセイ展示会などで、能力を高めた電気で炊かれたご飯を頂いたことは何度もあります。しかし、自分たちで必要と感じて想造した場は、与えられた場とは、その必要性とそこから得られる気づきの質がまったく違うと感じています。

「自分たちで必要と思って継続する場は強い」







命慧の物語

食べてみたら・・・

初回はみんなで持ち寄った命慧18台を連結して始めました。

炊きあがったご飯を食べる時、一斉に食べるのではなく、一人ひとり順番に食べていきました。こうする理由は、自分以外の人が食べた時の場の変化と、自分自身の変化を意識することで、感性能力を引き出す狙いもあります。

一人が食べ、二人が食べていくうちに、場のエネルギーはどんどん高まっていきます。そして全員が食べた後には、食によって高まった人の能力が、場を変えていくことを体感できるでしょう。

個々の肉体的な変化はそれぞれに自分の弱い部分に最初に反応が出たりします。そして同じ反応が、その場にいる人に起こったりもします。その都度、情報が共振共鳴しているのを体感することで、少しずつでも相手を知ることができるようになるのです。

私は、翌朝の寝起きがすこぶる良かったです。お米の最大の特徴は「眠りの活性（S活性）」です。まさにこれを電気の能力を高めることで体現できたということです。毎日この御飯を食べたらどれだけ生産性が上がることでしょう。命慧18台の投資は安いものかもしれません。

炊きあがりを季節に合わせてくれている？

プログラム農法で栽培された中島さんのお米は、いつもは水が多くても固く炊きあがります。しかし、初回の18連結の時は「水を多くした？」というくらいに柔らかく炊きあがりました。電気の能力が高まって、火力が増したのかと思いましたが、これだけ柔らかく炊けたのはこのときだけでした。

この日はちょうど冬至の翌日。昔から冬至には小豆粥を食べる風習があります。太陽が出ている時間が一番短い陰が極まった冬至に小豆粥を食べる意味は？お米は重湯にするのが一番エネルギーが高いと言います。水分量が多いほうがお米の能力を引き出せると推測するならば、このときに炊いたお米もお粥に近い状態に環境が誘導してくれたと考えられます。

涙が出るご飯

初回は4回ご飯を炊いて、合計4杯のご飯をそのまま味わいました。（たまに卵かけご飯にして）本当に美味しいご飯は、お米だけで十分なのだと思える美味しさです。

しかし、この実践の本当のすごさは2回目のじうしみのサロンの時におこりました。

食べた瞬間、全身に鳥肌がたちのぼり、目には自然と涙が溢れてきました。一杯のご飯が私にギブしてくれた情報の偉大さに気づくとともに、「一杯のご飯でガンを治そう」をこの御飯ならできるのではないかと思えました。

佐藤先生は「最高の能力は慈しみ」と定義しています。まさに「慈しみのご飯」。見た目にも「男性性が引き出されて、10代の男の子みたい（笑）（実際は50前…）放射エネルギーが変わって服がさっきよりよく見えるし、髪の毛もツヤツヤしてハリがある」と想像以上に若返っていたようです。

この体験に共鳴したように、次に食べた山下さんも目に涙を浮かべて「どんどん感謝が湧いていくる」と伝えてくれました。グループで学び合う意義はこうしたところにあります。

命慧を最大39連結

こんな体験をしてしまうと、自分の家でもこれに近い体験をしたくなります。そう、命慧がもっと欲しくなるのです（笑）実際に、じうしみのサロンの殆どのメンバーが命慧を買い増ししていて、最初18連結だったのが、今では最大39連結になっています。

残念なのは、一度39連結を体感してしまうと、18連結では物足りなくなってしまうことです。これは上を知ってしまうと、下との違いが明確になってしまうという法則。どこまでも高め続ける必要があるというのは、こうした現象からも見て取れます。

人間関係が変わる

3回目のじうしみのサロンでご飯を食べた後は、明らかにみんなの笑顔が増え、笑い声もあり、一段と和やかな雰囲気になっていました。「同じ釜の飯を食う」ことを3回、しかも食べるお米の能力を高めて食べることで、人間関係まで目に見えて変わっていったのです。これが劣性遺伝子支配のご飯だったら?もしかしたら関係性が悪化している可能性もありうるだろうと思いました。

環境とその能力をどう使うか?例えば、支部役員会を開催するのは支部事務局と決められているのも、環境の能力が人の能力に依存し、人間関係までも変えてしまうことをわかっているからなのでしょう。環境を改善する設えが何もないオンライン会議や貸会議室の環境で、優性、もしくは超優性の会議をすることは至難の技です。私たち首都圏支部の打ち合わせや活動も再考する時期にあると感じています。

みなさんも是非、体感してみて下さい

「同じ釜の飯を食う」実践は、みなさんが思っている以上に様々な変化を起こしていきます。会員全員で、同じ釜の飯を食う事ができれば、この会の個になる能力を高めることができるでしょう。その試みの一端を、10月の本部勉強会2日目終了後に、生命の泉を励起する会のイベントで体験することができます。この実験的な実践は、またの機会にご紹介します。

まずは、各支部でも取り入れて実践してみて下さい。

そして、その体験をもとに、自分の周りでも「お米のもつ能力」「同じ釜の飯を食うこと」「食の重要性」「一杯のご飯でガンを治そう」を発信してください。みなさんの心が動き、そこから発信された言葉が日本の食を、そして日本人の精神性を責め、じうしみのに向けて動いていくという想造をこの記事に託します。■

「じうしみのサロン」の命慧

1回目	12月23日(木)	18連（うち炊飯器用3）
2回目	1月16日(日)	18連（うち炊飯器用3）
3回目	1月29日(土)	21連（うち炊飯器用3）
4回目	2月20日(日)	31連（うち炊飯器用3）
5回目	3月29日(火)	31連（うち炊飯器用3）
6回目	4月19日(火)	20連（うち炊飯器用3）
7回目	5月9日(月)	22連（うち炊飯器用3）
8回目	5月27日(金)	32連（うち炊飯器用3）
9回目	6月13日(月)	25連（うち炊飯器用3）
10回目	7月4日(月)	28連（うち炊飯器用3）
11回目	7月25日(月)	25連（うち炊飯器用3）
12回目	8月17日(水)	29連（うち炊飯器用3）
13回目	9月7日(水)	**39連**（うち炊飯器用3）

身近な実践 Part 3

大都会で野菜作りにチャレンジ

鬼頭康子
（会員番号 4298）

畑を共有する「シェア畑」

ここ3年新型コロナの感染拡大により、東御の畑に行く回数が減ってしまいました。その間、自宅近くで野菜作りにチャレンジしたいと考えていたところ、そんな人達の要望に答えるような「シェア畑」なるものをネットで見つけ、自宅から比較的近い場所（車で10分程度）にある3か所の候補地から方角的にみて問題のない畑を選んで、今年2月より野菜づくりを始めてみました。

「シェア畑」にはお約束があります。

定期的なお世話に週1回は畑へ来てください。

道具、栽培資材は農園に備え付けられていますが、使用後は洗って所定の場所に戻しましょう。

作付けは基本プランを参考にして、これを変更する場合は届け出てください。

農薬、化学肥料の持ち込みは禁止です。

これら以外にも畑を借りている他の方へのエチケット的なことなども注意があり、「野菜づくりBook」なるテキストをいただきます。

お約束の内容には、エッ?と思うことも多々ありますが、アドバイザーの方と上手に相談しながら、まずは1年試してみることにしました。

まずは土づくりです。私たちが借りた畑は、元は住宅地の一角にある宅地でしたから、30cm位耕すとそのなごりでしょうか、結構石や瓦なども出てきます。土も粘土質ぽい感じです。いつも東御の畑の土をさわっている私たちにはその違いにびっくりです。団粒構造を作るために、有機化資材を入れることを了承してもらい、底力・真和X・AEC・岩森力・オールベスト・黒土を混ぜ、きわみ新次元水を散布し養生（3週間以上）しました。

めざめ液を使用して種から育てるか?農園の勧める苗を使うか?

勿論種からですよね!!

種まきが1カ月位遅くなってしまいましたが、チャレンジの始まりです。苗を農園に持ち込み、定植してから週2回のペース（少なすぎるけど）で芽かき、誘引、リバイバルX葉面散布、水やり（新次元きわみ水）などを続けると、私たちの気持ちが伝わったのか野菜たちはどんどん成長してくれます。

周りの方々の反応は?

たまに会う周りの畑の方々からは、

「何でそんなに生き生き育っているんですか?」

「違う水を撒かれているんですか?」

「葉がいつまでも青々としていますね」

「元気が違いすぎますね。どうしてでしょう?」

など聞かれることが増えました。

そうなんです。見るからに違うんです。（黄色の破線で囲ったところ）

週に2回位しか通えなかったため、大きくなりすぎて「おばけ胡瓜」や「おばけ茄子」になってしまったり、ミニトマトも一度にたくさん採れすぎたりと、計画栽培ができていない反省は多々ありますが、調理法をいろいろ考えることで、無駄にすることなく完食しました。また、孫たちとワイワイ、キャッキャ言いながら一緒に野菜を収穫するのも野菜作りの楽しみの一つです。

今後は、土のリフレッシュのために生体エネルギー応用農業資材を補充し、秋・冬野菜の植えつけに備えるつもりです。（農園としてのお勧めは、油かす、牛ふん堆肥を撒くことになっています）■

プランターに植えられた２株のきゅうり。今年は一株180本以上は採れています。

葉っぱがこの状態になっても、まだ実をつけてくれます。もちろん味も問題なしです。

身近な実践 Part 4

都会の家庭菜園で真の健康を取り戻す

大森弘司（会員番号 1281）

生体システム実践研究会に入会して約25年。これまで生体エネルギー応用商品、活用商品を使用して色々な驚きの体験をさせてもらいました。そして、この本物の技術に巡り会えたことに只々感謝しております。

さて、このコロナ禍の二年間、長野の本部や首都圏支部での勉強会が無くなり、さてどうしようかと考えた時、これは絶好のチャンスであると思い実践することにしました。

それは生体システム実践研究会入会前から始めた家庭菜園をさらに専門的に極め、

①一般消費者に優性遺伝子支配・超優性遺伝子支配の本物の農産物と生体エネルギー場を提供することで、真の健康を取り戻す手助けをする。

②無農薬・無化学肥料での有機栽培を信奉している消費者の意識変革を促す。

都会で行う家庭菜園の殆どは、場所・空間が限られているため畑や庭での野菜づくりは難しく、ベランダや花壇で栽培することが一番適していると考えました。

我が家では、長年限られた庭で効率よく野菜を栽培する為に、小さなベッド・花壇・鉢で夏野菜を中心に野菜栽培を実践してきました。

長年の経験から、生体エネルギーを高めれば長期間の収穫も可能であると確信し

①鉢や花壇を利用しての生体エネルギー場の改善。

②本物（高度な薬草レベルの優性遺伝子支配）の野菜づくりを目指しました。

２０２０年からの取り組みとして、生態系生体システムプログラム農法（プログラム農法）を本格的に導入する。生体エネルギー資材＋微量要素（五大要素＋α）と長年使用している我が家の土を混ぜ合わせた土壌を鉢や花壇、ベッドに使用する。

①一年目は生体エネルギー資材1に対し、我が家の土4程度の割合で栽培し、味覚はまずまずの物ができましたが、収穫期間が短く、その分収穫量も一般家庭プラスアルファ程度でした。

②二年目は、生体エネルギー資材1に対し、我が家の土3～4の割合で栽培。味覚はさらによくなり、西側の花壇にミニトマト一株とキュウリ二株を栽培し、キュウリ二株で300本以上収穫ができ、最後の方は変形が多くなりましたが、味落ちが少なく、美味しく食べられました。

③そこで三年目も同じ花壇でさらなる生体エネルギーアップを図り、計算値で50万Åまでのレベルに到達しています。残念ながらキュウリ一株は八月初旬で枯れてしまいましたが、残り一株はすでに180本収穫しており、量は多くありませんが現在新たな若葉が成長中で、花も実もつけています。

ちなみに今年は生体エネルギー資材1に対し、我が家の土2～3の割合で栽培しています。

この三年間、土壌の生体エネルギーの毎年20%アップを目指した結果、生体エネルギーを高めれば高めるほど、水やり・追肥が必要になりました。また、野菜の栽培管理もきめ細やかにすることが必要になってきました。言うなれば土壌だけでなく、野菜の生育状態をしっかりと見る見真・研尋が大切であると痛感しました。

家庭菜園による食の改善で明らかな体調改善を実感しています

自分で栽培して食べる実践のお陰で、自分の肉体も精神も改善していることがよく理解できます。

二年前は、夏に野菜への水やり等の栽培管理で毎日二～三時間庭に出ていた結果、熱中症一歩手前になってしまい、七月以降、栽培管理が疎かになってしまいました。

昨年の夏は体調も多少改善したものの熱中症二歩手前くらいの状態で、時としてふらつきそうになる等の症状がありました。

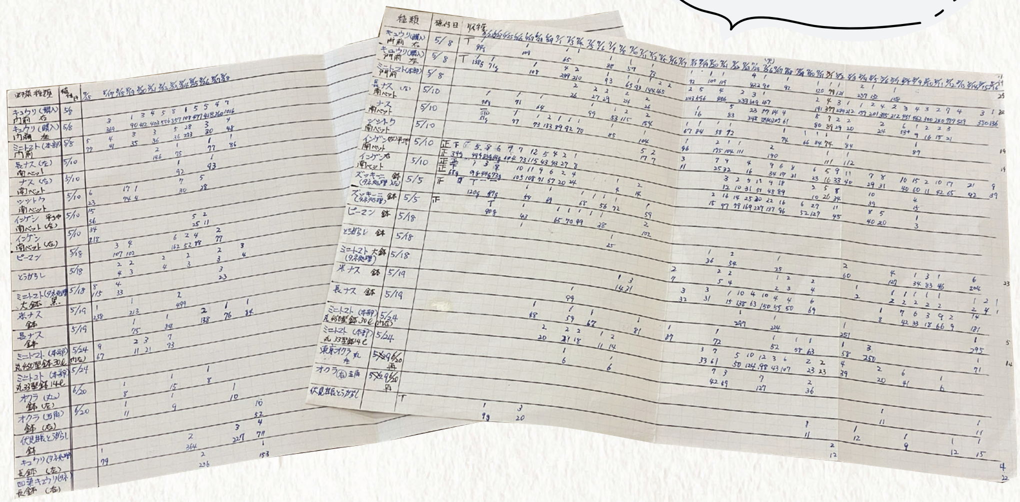
しかし、さらに生体エネルギーアップした今年の夏は、最低でも二十三種類の自家野菜を毎日食べられるようになり、長期間の収穫が可能となったために、アイアイさんの腰痛ベルトなしでも生体エネルギー資材と我が家の土を混ぜる等の農作業が可能となり、長時間の農作業でも膝や足首の疲れや痛みも感じなくなりました。また、常用していた弘慈堂の風邪薬も時々飲む程度になりました。

このように佐藤先生が以前から力説されていた食の大切さを身を以て体験できたことは、本当に感謝あるのみです。まだまだ未熟な野菜づくりの段階ですので、ご指導をよろしくお願いいたします。■

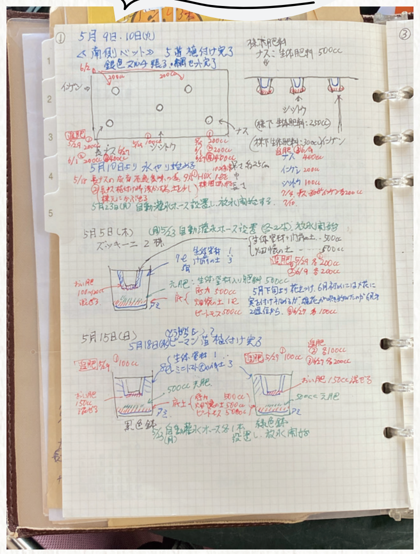
今季の栽培品目

キュウリ、四葉キュウリ、ミニトマト、長ナス、ナス、米ナス、シシトウ、インゲン、平さやインゲン、ズッキーニ、ピーマン、トウガラシ、伏見甘長トウガラシ、東京オクラ、オクラ　など23品目

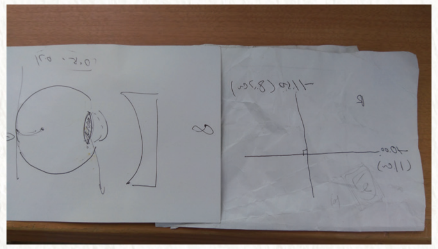
長野支部勉強会で、きゅうり栽培のプロ小川さんに話を聞く大森さん。



日毎に収穫数と重量の統計をとって次の栽培に活かしています。



栽培計画や、施肥設計が細かくメモされたノート。



身近な実践 Part 5

栗根達志
（会員番号 4428）

首都圏の実践者探訪

六角橋 アサクラメガネ
新宿食肉センター極（本店）

1 六角橋 アサクラメガネ

東急東横線 白楽駅を降り、少し小高い住宅地を5～6分歩いて大通りにでた交差点の先にアサクラメガネ店がありました。中へ入るとご主人がにこやかに迎えてくださいました。メガネを作り直すのは10年ぶり以上であること、主に運転用であり夜に市街地を走る際の視認性を良くしたい（つまり、今のだと少々見づらい）といった要望をお伝えしました。

早速、検眼・測定を行って頂き、現存のメガネだと視力0.5程度（免許更新時だと不適格）であることや、今回作るメガネにおいては手元の文字が楽に見えることよりも遠方を明瞭に見られることを重視するセッティングにして頂き、その違いも適宜レンズを差し替えて体感しながら確認させて貰いました。

根っから技術好きの私としては色々と質問させて頂きましたが、懇切丁寧に図解しながら「乱視は主に縦方向と横方向で焦点距離のずれが・・、栗根さんの場合は、縦がマイナス11.50に対して横はマイナス10.00と縦の方が悪くて・・」「今は白内障は眼内レンズ手術によって却って良く見える眼にいかようにでも出来て・・」等々、どこまでも幅広く納得ゆくまで説明をして頂けました。

気が付くと1時間以上が経っており、ではそろそろフレームを・・となり、ここでも私の意向「ド近眼でレンズが分厚くなるので基本的には小さめのフレームを考えてます」を伝えると、私の目が悪いのは以前にお会いして見抜いていらっしゃったようで「用意しておきました」と意向通りのフレームが出てきました。

即決すると、さっそく顔に合わせてフィッティング調整してくださいました。どこまでも懇切丁寧な対応でございますね、ありがたい限りです。

また、ご存じの通りアサクラメガネさんでは「生体エネルギー技術を施したメガネ」として受け取れます。1時間半掛けて都内から横浜近辺までメガネ買いに来る価値は、先に述べたご主人のお客様に対する真摯なメガネ愛あってこそですが、スペシャル仕様が手に入るのも大きな魅力です。何のことかは直接お問い合わせください（ネジ一本でも・・）。

さて、店内で話に花が咲いているとき、颯爽とした女性が見えられまして、ご令嬢であることが判り、ご挨拶させていただきました。彼女は現在、アサクラメガネ店のすぐそばに店舗を出展すべく準備中とのこと（美味しく健康的なモノ・・らしい）、こちらもこうご期待ですね。

2 新宿食肉センター極（本店）

アサクラメガネの帰りに、新宿まで足を延ばしてみました。

前々から行ってみたいと思っていた新宿食肉センターkiwameです。

新宿の歌舞伎町という屈指の繁華街の一角にありました。店に入ると金曜日とはいえ未だ夕方6時になったばかり、なのに「すみませ～ん、ご予約の席で7時までで良ければ・・」とのこと。既に満席状態で、最後のひと席に潜り込めました（ついてますね）。

やはりというべきか、まず焼肉なのに店内に嫌な臭いがしない。時間が無いので今回は内臓系を頂くことにしました。生ビール、アミレバー、ミノ、モツを注文するとつきだしのキュウリが出てきました。このキュウリに掛かっているごま油（？）が既にとても旨い。油の良し悪しは健康にも重要ですが料理の旨さにもダイレクトに響きますね。

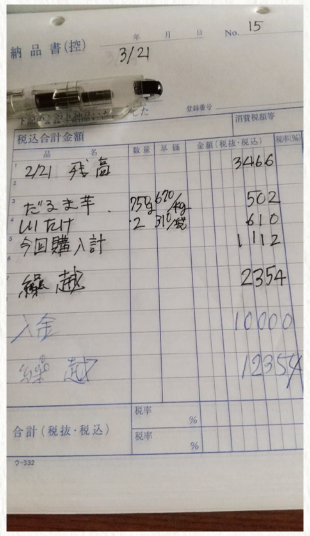
バクバクと焼いては食っておりますと肉の油が燃えだしましたが、これがまた変な臭いがしない。油自体の良さと燃え方の良さなのか、手で嗅ぐってみても食欲をそそるのみで咽る（むせる）感がありません。

そうこうしてるうちに、あっという間に平らげて時間も丁度となり本日はこれまで。ごちそうさまでした。■

長続きしている共同購入

身近な実践 Part 6

古谷千明
（会員番号 4134）



私は実践研究会の生産者さんの品々を継続的に共同購入しています。食べて身体と心の健康のプラスになる商品だと納得しても、一家族分だけの購入では送料の負担が大きい。そこで10年ほど前に近くに住む会員の榛谷さんに共同購入を持ちかけ快諾を受け始めました。

榛谷さんから分ける人たちと、私が配るメンバーの注文を私が纏めています。

現在、私が直接お渡しするのは同じ私道を使うお宅三軒と子育ての過程でお付き合いしていた方々で、雨が降っても気楽に届けられるごくごくご近所さんです。それから、我が家でミニ勉強会をするようになり、時にその参加者にもお渡ししています。

毎月6日、21日を目処に定期的に取り寄せる商品と、私の希望で季節商品など届いた後も品質の保持ができる品をBCCのメールやラインで案内し希望を聞いて発注します。届いたら送料も含めた代金の計算をして仕分けをして渡します。

お互いに負担にならないよう、先方が留守でも玄関先に置いて済ませたり、金銭面でのトラブルが起きないように伝票を使い工夫しています。受け渡しごとの支払いか、お預かり金から差し引き計算するかは先方に決めてもらっています。

このような実践が長年続いているのは、私自身にとって必須な食品の良さを一緒に購入してくれるメンバーも認めてくれているおかげです。そしてこのご縁で生産者の皆さん、そして身近な人たちと日常的にお付き合いができ嬉しいです。

生体エネルギー技術についても言及はしていますが、都会では人各々で付き合い方の流儀が違うので、セミナーの案内や入会の勧誘には重きを置いていません。それでも将来、時間的に余裕のあるママ友が増えてきたら、取り寄せと組み合わせたオープンハウスを実現したいです。そして集まる人にギブできるような準拠位置の高い場を創るのを目標にしています。■

身近な実践 Part 7

環境投資でビジネスに新風を！

自主セミナー＆体験会

6月1日に、産業人の方々をお招きしながら、生体エネルギー技術の実践者である会員を講師に迎え、東京王子駅前の北とぴあでセミナーを開催しました。

最初に栗田幹事長から、生体エネルギー技術の成り立ち・農業由来技術を様々な産業へ展開していることなどを初見の方でもイメージできるよう簡潔に説明があり、会場の集中力がぐっと高まりました。

一人目の講師、石見大田工業㈱竹田浩之さんからは、石膏ボードのリラックスウォールによる住環境への好影響（ストレスの大幅低減）について人と住環境に留まらず、畜産における厩舎へ適用することによる成長の差異やたまご・肉質・成分の変化など多角的にご説明頂けて、参加者のやる気スイッチがシッカリONになりました。

併せて、休憩時間中にはリラックスウォール3段重ねの上に直に乗っていただき、身体の変化を屈伸運動や呼吸の深さ、Oリングテスト等で確認いただくと共に、食味テスト（醤油、ワサビ、ワインほか）による変化も各参加者にご確認頂けました。体験コーナーで体感いただくと共に改めて環境によって動植物（人や食べ物）総べてが影響を受けることが腑に落ちていらっしゃる方が多く見受けられました。

二人目の講師、荒川洋一さんからは、生体エネルギー技術を長年にわたり賃貸住宅へ適用されてきた実績に基づく説得力のある発表となりました。この賃貸住宅へ越されてから元気を取り戻し、ベランダで年間700個もの干し柿を作るようになった御年95才のご婦人の干し柿づくりの様子は、環境の重要さ・環境の影響の大きさを雄弁に物語ってました。

また、基本的な建築資材として基礎工事における『底力』の適用、コンクリートへの『力丸』の適用、および生体エネルギー技術を適用したコンクリートから周囲環境へ好影響を与え続けるといった基礎の話をされた上で、リラックスウォール利用以前の部屋では石膏ボードの悪影響（人へのストレスとなる）が時間とともに徐々に改善することは把握していたが、リラックスウォール導入後の部屋では最初から悪影響（人へのストレス）が無くなったといった話も丁寧に説明してくれました。

具体的に店子の大手学習塾の効果事例も紹介し「ここの建物にある教室の生徒は他とは違って集中力が高く、生徒からも『2時間の授業があっと言う間にすぎる、連続してもう1コマ受講できる』との声がある」脳波的にもθ波（シータ波）というリラックスかつ集中という状態（一流スポーツ選手のゾーン状態）となっていることなども説明されてました。休憩時間にも多くの方から質問を受け、積極的に応対されてました。

三人目の講師、㈱DIGプライミング香月純也さんからは、視点を替えて農業生産におけるグローバル化を身近に実現可能とする道筋をご紹介頂きました。

香月さんは、某大手流通会社（以下、D社と略す。ドンドンドン♪ドン〇〇♪）と長年取引して信頼関係を築いた関係で、D社の食料品の海外展開についても相談を受ける間柄となっておられます。

D社は1兆7千億円の売上（グループ全体）の内、1千5百億円が海外売上。国内の食品の売上げの割合は全体の35％、一方で海外は85％が食品であること。また、D社の海外店舗は100％日本国内の商品を展開しており、海外における日本ブランド人気の高さと高価格品として売れることを実感されていること。2030年までに海外売上を現在の1千5百億円を1兆円へという目標を掲げていること。出店舗数でいうと、現在はアメリカ65店舗、アジア30店舗。これを2024年までに200店舗に増やし、2030年までには1000店舗を目指す！とのこと。そのため、日本国内の食品供給者を渇望されていること。

と、実に景気の良い話をして頂けて、私が30年若かったらサラリーマン辞めて農業を始めたであろう夢のある（かつ現実の）話をして頂けました。

既に北海道の農林畜産業者を能源㈲中澤さまのコーディネートにより何か所かの生産者へD社の方を1日ツアーで案内して頂き、大変な驚きと共に関心を持って頂けました。

例えば「畜産業における、山積みのウンコ（背丈の倍以上の高さ）を見に行こう」と言われて、余り乗り気でなかったのだが行ってみると『その臭く無さ』に驚愕した。

「チーズの生産が通常の半分の期間で熟成する。微生物の活性度合いが高くなっている証左であり、当然味の向上にも繋がっている」等々。

生体エネルギー技術の出番が数多くあることを実感できる元気の出るお話でした。

参加者について

今回のセミナーでは、ご招待客の皆様からも一言ずつ自己紹介とご意見を頂きました。

畳屋さん、介護や不動産の経営に携わっている方、整体院を経営されている方、自動車リース業の経営者など、みなさんが一様に言われていたのは「自分たちのやっていることに生体エネルギー技術が具体的に何か使えそうだ！」というヒントが得られたということでした。

荒川さんの賃貸住宅へ越されてから元気を取り戻し、ベランダで年間７００個もの干し柿を作るようになった御年９５才のご婦人

2022年6月1日㈬　北とぴあ 飛鳥ホール

13:00 〜 14:30	**① 住環境で住まう人へ真の安らぎを！** 石膏ボード（リラックスウォール） ストレス値が下がり動植物も活性化 **石見大田工業 株式会社 代表取締役 竹田浩之**
	② 投資すべきは・・・住環境の能力？！ 不動産賃貸経営における核心と要諦 「三方よし」を超える「すべて良し」でがっちり！！ **豊大 株式会社 代表取締役 荒川洋一**
休憩・体験会	
15:00 〜 15:40	**③ 農業生産環境の違いで世界をも制す** 大手流通業の世界進出の波へ乗ろう **株式会社 DIG プライミング 取締役 香月純也**

リラックスウォールの体験コーナー

セミナーの内容に関連する、真和の過去記事を拡大して掲示しました

今回参加された皆様は、まったく初めて生体エネルギーの話を聞くというのではなく、誰かから少しは話を聞いていた人たちです。ただ、自分の友人ひとりからそういう話を聞いただけでは少し怪しいと感じていたという人も複数いらっしゃいました。このセミナーに参加したことで、感じていた怪しさが払拭され、次のステップに進もうと思ってもらえたことは、まさにこのセミナーを開催した目的のひとつでもあります。

より多くの生の実践事例を聞けることで、これまで聞いていた話の説得力が増し、より具体的なイメージも湧くようです。複数の種類のツールを使った実験で効果を体感できることもそこに大きなプラスになります。また、会員だけに囲まれるのではなく、他にも「初心者」がいるという環境も大切だと感じました。特に、この技術に「怪しい」という疑いの目を持って参加した人たちが他にもいて、その人たちと一緒に怪しさを消し去ることができることは心理的な安心感にもつながるようです。

セミナーの活用方法

また、今回も、首都圏以外の会員さんにも多数ご参加いただきました。中でもこのセミナーを最も活用してくれたのが、宮城県から参加された佐々木香織さんです。彼女は、宮城県名取市の化学物質過敏症の患者の会「ぴゅあい」の代表者です。

化学物質過敏症は、多くの人たちが何も感じないような化学物質に体が反応し、体調不良に陥る病気です。以前は、シックハウス（住宅の建材の臭い）や農薬が原因だったのが、最近は、柔軟剤のような強い香りによる「香害」が原因であることが増えています。何か1種類の化学物質に反応して体調が悪くなると、他の化学物質にも反応するようになり、寝たきりに近い状態になることもあるとのこと。佐々木さん自身も数年前にはそのような状態だったそうです。それが、天音との出会い、きわみの導入などを通じて、いくつかの生体エネルギー資材を使用することで劇的に体調が回復したそうです。彼女はいま、まだまだ世の中に知られていない化学物質過敏症のことを行政や企業に理解してもらうこと、それから、その対応策として生体エネルギー技術が活用できるので、患者さんたちにも普通の生活に戻れる可能性があることを、さまざまな場所で、媒体で伝えようとしています。

今回のセミナーにはそんな活動の中で出会った人たちを3人連れてきてくださいました。生体エネルギーにまだ馴染みがない人たちに、本部がある長野まで足を運んでもらうのはハードルが高いことが多いです。人が集まりやすい首都圏でセミナーを開催することの重要性もあらためて感じさせていただきました。

今回のセミナーは、首都圏支部としての開催ではありません。何人かの有志による開催です。本部や支部が主導して実施することに会員みんなが協力をするというのも必要ですが、会員同士が自発的に協力し合って何かをするということも必要だと思います。

化学物質過敏症の佐々木さんが会員になったことがきっかけで、化学物質過敏症への理解をより深めるために、この日登壇した荒川さん、竹田さん、司会をしていた栗田さん、裏方として手伝ってくださった大野さん、竹田さんのリラックスウォールの流通を担当している西口さん、東関東千葉支部の重鎮、津島さんなどが、シックハウス診断士と環境アレルギーアドバイザーの資格を取っています。佐々木さんの活動をサポートし、生体エネルギー技術をもっと世の中に広めていくためです。

ひとりだけでできることは限られています。いろんな会員さんが、それぞれの得意分野を生かしながらお互いに協力して目的を成し遂げる。この日のようなセミナーの開催も含めて、お互いが協力し合える環境をもっと作りたいということも、あらためて感じた1日でした。

ご協力いただいたみなさま、ご参加いただいたみなさま、本当にありがとうございました。■

宮城県名取市で開催された「シックハウス診断士」の資格取得講座。当会からも8名が受講しました。両脇の三脚の上にあるのが、化学物質測定機器です。(黄色丸)

シックハウス診断士の講師（前列右のお二人）、前列左から２人目が佐々木さん

No.283 はじめの一歩

リレー投稿 Since 1999

まつもと よしひろ
松本 喜裕
（大阪府・会員番号2786）

大阪の松本喜裕と申します。堺市の泉北ニュータウンで歯科医院を開設し35年になります。「歯にやさしく体にやさしく人にやさしい」を心がけています。

20数年前、生体システム実践研究会やプログラム農法を船井幸雄氏の著書で紹介されていたのを自然農法、EM農法等に興じる家内がわたしに教えてくれたことがご縁を持つきっかけとなりました。

佐藤先生の「一輪の花でガンをなおそう」に心惹かれ、大阪での先生の勉強会や支部の自主勉強会に参加するようになりました。農業ばかりでなくあらゆる産業に応用できる技術があり、自らの生活や診療にも活かせる事実を知ることになります。「言っているだけでなくやっている集団」～和歌山市民プール等々の実践を知り、排水にも責任を持ち安心してつかえる水を使いたい「これが必要」と思うようになりました。

以前より生活や診療に使っていた逆浸透膜浄水器は「毒は除く」ものでしたが「毒を毒でなくす」は目から鱗でした。生命を励起する水、電気を使用することで安心を得たい。住環境も良くしたい。仕事場に応用してみたい。歯科材料の内容・機能・性質を向上させもっといいものを提供したい。電磁波～レントゲンのマイナスを減らしたい。様々な願いが沸き立っていました。

当時幹事長をされておりました朝田先生から教えて頂いたリトムボードをリビングルームの床～診療室の天井に配置したのを手始めに、当時㈱シマムラの島村幸夫専務さんにお世話いただき循環型水誘導翻訳装置導入その後、電気誘導翻訳装置を導入してゆくことになります。やす丸を壁紙に施工した頃から治療中に患者さんが寝ているのを見かけるようになります。幼き頃より診察にやって来るマオちゃんシンちゃんは成人近くなった今でも目を離すと寝ています。

さて、2000年ごろ、本物の技術を求めて本部へ通い始めます。聖和学園ドクターコースで渋谷直樹先生、和嘉子先生に沢山の事を教えていただきました。情報処理、想造量子宇宙論、原点的言語、そうぞうする力…。日々の要請に追われ、ものことを区分けし、WHYよりもWHATとHOWを繰り返すロボット先生である私にはここでの学びは既成概念を超えた超日常かつ毎回新鮮なものでした。と同時に未消化なことが膨らんでいきます。このころを振り返ると、「それ以上聞かんといて」と言いながらも教えてくださった当時の大阪支部長の入江さん、金属の情報処理を指南してくださった人間構学補綴研究所山口さん、熱心に学ぶ諸先輩方、お世話になった方々のお顔が次々と浮かんできます。先生・生体システム実践研究会で繋いでいただいた仲間がいたからこその学び実践と思います。ドクターコースで10年～研究員研究会、新しくじんちを構え10年、その後診療所のお隣を取得して院内改装、子供たちが歯科医院に従事、ビクマシステム導入・・然るべきものが然るべき時にやってきて会うべき人に出会います。RAMPA、CDRG等本業の学びも然りです。じんちづくりは肝要でお陰様で大過なく過ごさせていただいています。約2年ぶりに6月本部勉強会に参加しました。コロナ禍で本当にしたいことが分からなくなり本心を求めていた折。だからこそ、本部では原稿依頼が待っていました。はじめの一歩～原点回帰「もともとの願いに立ち返れ」という呼びかけと感じました。2日間の講義で先生は4次産業から零次産業まで開示されました。目指すべき青写真である零次産業を聴き「私の零次産業」に想いを馳せ久々のワクワクでした。「一粒の金属で身体を癒したい」・「人を癒したい」・・願いを新たに描き直し私にできること、できるのにやっていなかったことを淡々と続けてゆきたく思います。

仲間に心開きやれることをこつこつとやっている一日目竹田さんの実践報告にも深謝。

次は、北海道支部の堀川優子さんにバトンタッチいたします。

編集部より
本誌は会員のひとりひとりが作り上げていく会報誌として、投稿された方の生の声を尊重しておりますが、実践や理論の専門的なことは生体エネルギー研究所に監修を依頼しております。内容により一部表現を変更させて頂く場合がございます。どうぞ、ご了承ください。

お知らせコーナー

◎社会貢献事業のその後

2011年（H23）の社会貢献事業にて、静岡県の「浜松市発達医療総合福祉センター はままつ友愛のさと」に水誘導翻訳装置きわみMI-64Tが寄贈されました。

ここには、診療所、療育センター、相談支援事業所、児童デイサービス施設、障害者生活介護、就労継続支援施設、障害者生活介護センター、身体障害者福祉センター、地域活動支援センター、障害者体育館、障害者プール等の広大な施設があり、一日の利用者は職員も含めると500人近いそうです。

きわみの水は、この全ての施設に通水されています。

昨年、4月に伊熊理事長と鈴木事務局長が新しく着任されました。

左側から丸山支部長、栗田幹事長、伊熊規行（いのくまのりゆき）理事長、鈴木和彦事務局長

支部会員の方のご協力を頂き、障害を持った子供の幸せを願っての寄贈から早11年が経ち、今回で5人目の理事長のご挨拶になります。

昨年の新任時にご縁を切らさないようにという思いでしたが、コロナ禍ということもあり、今年の9月22日㈭に、施設に新たに掲示して頂く「きわみのパネル」を持参して、栗田幹事長と丸山支部長と中山事務長とともにご挨拶に伺いました。

この施設の自閉症児療育は全国的にも注目を集め、関係者の見学者が絶えないそうです。こうした施設の善行の影で、私たちきわみが尽力していると思うと、私たち会員の会費の一部が有効に活かされていることを感じられて嬉しくなります。

敷地北側に設置されたきわみ MI-64T
来館者は誰でも見ることができます

はままつ友愛のさとの外観

今後の日程

	勉強会・イベント	10月	11月	12月	お問合せ先
本部	本部勉強会	7,8	11,12	2,3	0268(64)1436 s-energy@chive.ocn.ne.jp
本部	FTーグループ				
本部	水に産業を託する会	15 16			
本部	生命の泉を励起する会	8			
支部	北海道支部	15			0145(45)2899 info@nogenweb.com
支部	青森支部				017(763)0880 takako@t-mirion.co.jp
支部	山形支部				0233(28)0313 hayasaka@ic-net.or.jp
支部	宮城支部				022(287)3254 shinden@e-shinden.com
支部	栃木県支部				028(635)2967 999@homaru.co.jp
支部	東関東千葉支部				0299(66)1395 imagine-shop@sopia.or.jp
支部	首都圏支部	15,16 東京湾大感謝祭			03(5524)1777 seitai-syutoken@potbefo.com
支部	山梨支部				0553(22)1973 hajime@fruits.jp
支部	長野支部	15			0268(62)3532 info@e-marusei.biz
支部	新潟支部				025(280)2058 nakanof@seagreen.ocn.ne.jp
支部	静岡県支部				053(426)8321 ikiiki@silk.ocn.ne.jp
支部	東海支部				0531(22)6581 toukaisibu@mac.com
支部	関西支部				073(426)2266 seitai-m@shimamura1842.jp
その他	■研究員研究会				0268(64)0248
その他	■農業経営者研究会	13			0268(64)1436

■印の勉強会は参加者に規定がございます。お問い合わせください。
※今後の新型コロナ情勢により変更する可能性があります。最新の情報はお問い合わせ先に確認してください。

編集後記

今日はインテックス大阪で開催されている建築の総合展示会「ジャパンビルド」に来ている。生体エネルギー活用石膏ボード「リラックスウォール」のブース説明員として一日中立ちっぱなしの慣れない仕事だ。

展示会場では、ブースの構成からパネルのデザイン、人との距離感や話の流れ、実験の手法、パネルやしらべの置き方ひとつで場は変容していく。無数の判断と工夫の積み重ねがなされた場に人が身をおいた時に、何を感じとってくれるか？このブースに縁を感じて留まってくれるには何が必要か？

こうした視点は「真和の編集」にも多くの共通点がある。どうしたらこの冊子を手にとって読んでもらえるか？何かを感じ、心に留め、行動に移る次元の冊子にするために必要なことはなにか？その前提の前提の前提を徹底的に考えて加学し毎月実践していく。

まったく接点のなかった人にどう伝えるか？展示会では多くの人の生の声を聞くことができる。心を開いて相対と向き合えた！と感じる瞬間、そこには自然と歓びが湧き上がってくる。これも相対があればこそなのだと実感する。

編集部長　大野純平

真和 2022年10月号
第28巻_第080号/通巻330号

生体システム実践研究会会報

発行　生体システム実践研究会
幹事長　栗田康弘
編集　大野純平・金田直子
監修　生体エネルギー研究所
印刷　株式会社ジャパン・スリープ
題字　山川宗休老大師

「真和」編集部
〒389-0511 長野県東御市滋野甲4187-3
TEL：0268(64)1436
FAX：0268(62)1782
メール：s-energy@chive.ocn.ne.jp